

キリシタン資料における「あい(愛)」について

漆 崎 正 人

一 はじめに

『日葡辞書』(1603—4年)には、「あいす(愛す)の項目は、
Aixi, suru, ita, Yicucuximi, u, Amimar, ⑤ mostrar sinaes
damor. ⑥ Item, Estimar, ⑦ folgar com algũa cousa
que lhe da gosto. ⑧ Fanauo aisuru. Folgar de ver as
flores, ou fullas. (訳: 愛シ、スル、シタ。愛シ、ム。
かわいがる、また愛のしるしを見せる。『さらに、お氣
に入りのものを愛好したり、楽しむ。』花ヲ愛スル。花
や花卉を見て楽しむ。)

とあり、既に言われているように、自分に〈快楽を与えるものを
楽しむ〉という意義として、「人間的な感情的な『楽しみ』を表
わしている」と受け取れる説明になっている。さらに、この説明
には、当該行為の主体が、上位者や優位者であつて、下位者や劣
位者を対象として自分本位に一方的に、心を持ったり、あるいは
可視性を伴う行動を取ったりすることを含意していると解される
ことを拙稿^{註2}で指摘した。そのような意義のことばであると当時の
宣教師たちが理解していたとすれば、キリスト教的愛を表わす訳

語としては相応しくないことになるわけであり、確かに「あいす(愛
す)」は、一般にキリスト教的愛とは結び付かない文脈で用いら
れている。

ところで、漢語名詞としての「あい(愛)」は、単字漢語であ
ることもようが、キリシタン資料では、極めて稀れにしか用
例が認められず、その用いられ方についての言及も確認できない。
そこで、本稿では、ごくわずかしが使用されていない、キリシ
タン資料における「あい(愛)」を取り上げ、検討することにする。
なお、古典文献からの引用は、原則複製本により、翻刻による
場合は、テキストを明記する。また、ローマ字本のキリシタン資
料からの引用に際しては、ローマ字を適宜漢字仮名交りに直すこ
とがある。

二 主要な古語大辞典等における「あい(愛)」の項目について

まず、室町時代から江戸時代初期にかけて、「あい(愛)」が、
どのような意義を持つと解されているか、『時代別国語大辞典
室町時代編』第一巻(1983年刊・三省堂)(以下、『室町』と呼ぶ)

の「あい(愛)」の項目の記述を中心に見て行くことにする。^{注3)}

あい「愛」^{「あい(愛)は、いとしく思ふこと」}(落葉) ①人をいとおしく思う気持。

親子・兄弟間などの情愛。「愛ハ、イトウシガル事也」(謡抄^{梅枝})「親ニモ超テムツマシキハ同気兄弟ノ愛也」(太平記^{寛永九年、御事})

②ある事物に心ひかれて、それを大切に取扱つて楽しむこと。「事態ヲ極テワ、ツヨクナル所ヲ用心スベシ。達スレバ強ナル。ツヨサ過ル時愛モナク用モ無クナル也。是ハマコトノツヨキ位ヲ不^レ智^ヘ知^ルユエナリ」(寛正本六輪一露秘注)「慈照院殿愛に思召るゝ壺あり」(醒睡笑^ハ)【参考】キリシタンでは、愛情を表わす語としては「大切」が用いられた。

愛をなす その人に対する愛情を、実際の言動のうえに表わす。「おいたる人をば、かりにもあなどるべからず。をのれよりおさなきをばいとをしみ、あいをなし、貧なる人あはれみめぐみて」(短編^{七くさ草子})

『日本国語大辞典 第二版』第一巻(2001年刊・小学館)(以下『日国』と呼ぶ)など、主要な国語大辞典、古語大辞典で、室町時代から江戸初期にかけての使用例が存する意義としては、『室町』のもの以外には、例えば、『日国』の「あい(愛)」の項目の第三義の、

③子供などをかわいがること。愛撫(あいぶ)すること。幼児をあやすこと。*鷺伝右衛門本狂言・縄綱(室町末―近

世初)「其上悴をようてうちやくしたな」『てうちやくは致しませぬ愛を致しました』*浄瑠璃・頼朝伊豆日記(1593頃)二「いだき上、ちぶさ参らせかきなでて(略)なげき給へば若君は、いつものあいとおぼするにや」

を、挙げることができる。『日国』の「あい(愛)」の③は、『室町』の「あい(愛)」の①の「人をいとおしく思う気持。親子・兄弟間などの情愛。」に含めることができなくもないが、『室町』の①は、肉親間の情愛に重きがあり、『日国』の③などの「子供などをかわいがること」というのは、肉身とは限らない子供一般を指すと思われるので、『日国』の③などは、『室町』の①とは別義と見做すべきであろう。したがって、室町時代から江戸時代初期にかけて、「あい(愛)」が有している意義としては、(1)「人をいとおしく思う気持。親子・兄弟間などの情愛」、(2)「子供などをかわいがること。愛撫(あいぶ)すること。幼児をあやすこと」、(3)「ある事物に心ひかれて、それを大切に取扱つて楽しむこと」の三義があることが知られていることになる。

三 キリシタン資料における「あい(愛)」の現れ方

ここでは、キリシタン資料における、数少ない「あい(愛)」の用例を検討することにする。

三・一 『落葉集』における「あい(愛)」の現れ方

キリシタン資料の辞書である『落葉集』(1598年刊)には、掲出漢字「愛」の付訓として「あい」が現れている。

①愛あい「客かく河が……」(本篇)

②愛あい「色葉しき集しむ」(「色葉集」)

③愛あい「小玉篇」

④自みづか「愛あい……」(本篇)

これらの「愛」のうち、①は熟字の上字を兼ね、④は熟字の下字を兼ねているが、①の下訓の「あひす」、④の左訓の「あひす」は、明らかに単字としての用法のみの訓である。一方、②と③では、「あい」は②においては「愛」の左訓、③においては「愛」の右訓の位置にあり、そのことから「愛」と「あい」との結び付きが強いということ以上のはわからない。

三・二 『妙貞問答』における「あい(愛)」の現れ方

日本人イルマン不干斎巴鼻庵の著『妙貞問答』(1605年成)は、「上巻に仏法、中巻に儒道・神道を破し、下巻にキリシタン教理を述べた護教のカテキズムである」^{注4}が、その上巻の「天台宗之事」「日蓮宗」のところで、「真言宗之事」のところに、まとめ

て現れている。^{注5}

まず「天台宗之事」「日蓮宗」のところに、四例、

①現在ノ三因ト申ハ、一ツニハ愛ト云テ、十六、七歳ヨリ姪欲ノ念ヲ起シ、求ルヲ申也。(三二三ページ)

②三ニハ有トテ、彼愛、取ノ業ヲツクル処ヲ云リトソ。(三二三ページ)

③サレハ、生トハ、愛、取、有ノ業ヲ作レハ、必又前ニ識ト云レタルコトク、生ヲ受ル者アリ。(三二三ページ)

④人ト云者ノ姿モ、元来有ヘキ物ニアラサレトモ、父母ノ起ス妄念、無明行ヲ因トシ、其ヨリ識、名色、乃至、愛、取、有ナトノ因縁ニヒカレテコソアレ、(三二六ページ)

とあり、「真言宗之事」には、二例、

⑤薩、王、愛、喜、宝、光、幢、咲、法、利、因、語、業、護、牙、拳、是ヲ十六大菩薩ト云。(三三五ページ)

⑥譬ハ、愛ヲ起セハ愛菩薩、欲ヲ起セハ欲菩薩、歌ハ歌菩薩、舞ハ舞菩薩、ト云カコトシ。(三三五ページ)

と見える。「天台宗之事」「日蓮宗」の用例によれば、「あい(愛)」は、「姪欲ノ念」から生じる煩惱であり、次の段階として「二ニハ取トテ、ヨワヒサカンナルニ随テ愛念ニ著シ、是ヲ専ニトル」(三二三ページ)ようになり、「愛」が、「有」という「取ノ業」を作るとされる。また、「父母ノ起ス妄念、無明行」が、「愛」、「取」、「有」の根元とされており、つまり、「愛」は欲望(愛欲)と捉え

られているわけである。「真言宗之事」にある、⑤、⑥の二例は、「天台宗之事 日蓮宗」での、「あい(愛)」の規定を踏まえての言及であり、⑤、⑥の場合も、欲望(愛欲)として「あい(愛)」が捉えられている。

このような〈欲望(愛欲)〉の意義は、『室町』の、「あい(愛)」の項目の語義としては立てられていないわけであるが、例えば、『日国』の「あい(愛)」の項目の、

②仏語。④十二因縁の一つ。ものを貪(むさぼ)り執着すること。欲愛(性欲)・有愛(生存欲)・非有愛(生存を否定する欲)の三愛その他がある。*正法眼蔵(1231—53) 仏教「十二因縁といふは、一者無明、二者行、三者識、四者名色(みやうしき)、五者六入、六者触、七者受、八者愛、九者取、十者有、十一者生、十二者老死」*妙一本仮名書き法華經(鎌倉中)二・譬喩品第三「もし貪着して愛(アイ)をなさば、すなはちためにやかれなん」*俱舍論一九「在^ニ姪愛前^一受、貪^ニ資具姪^一愛」

の語義に相当するものである。『日国』では、国内文献の用例としては、『正法眼蔵』(1231—53年成)と、『妙一本仮名書き法華經』(鎌倉中期成)から挙げているだけであるが、『妙貞問答』に「あい(愛)」の六例が確認されたことによつて、一七世紀初期の文献にも使用例があったことになる。また、『室町』の「あい(愛)」の項目にも、新たに、仏教語としての〈欲望(愛欲)〉

の語義を立てる必要がある。

ところで、『室町』には、「あい(愛)」の動詞形の「あいす(愛す)」については、次の語義を掲げている。

あい・す「愛す」(動サ変)「愛^{あい}す^{あい}」(落葉)●人や動物などの生き物に対して心が強くひかれ、それをとてもかわいく思う。また、その気持をそのものに對する態度・行動の上に表わす。「Aixi, suru, ita. (アイシ、スル、シタ)。「愛シミ、ム」。かわいがる、また、愛しているしるしを外に表わす」(日葡)①幼い者・目下の者や動物に對して、いつくしみの心を持ち、かわいがる。「唐人^{イコ}家ヲカウハ、用ノ時殺シテクワン^ヲ為也。愛スルコトナシ。愛シテ不^レ敬珍禽奇獸ヲバ愛シテカヘドモ敬スルコトナシ」(応永本論語抄^{為政})「二人の幼い人をあひしたる女人あり」(短編Ⅱ ひとやもんの本地^中)②特に、異性を寵愛する。「趙幽王友ハ諸呂女ヲ為^レ后不^レ愛シテ他姫ヲ愛シタホド二諸呂女ガ怒去テ」(史記抄^{十四})「在京の程召使はれ候へとて優なる女房を一人つかはしけり。：岡部在京の程愛して比翼連理の思ひをなしなければ、程なく子を一人まうけたり」(短編Ⅱ 京大本花みつ)③愛情を行為に表わして、特に相手の身体にふれる。愛撫する。「夜にもなれば、その内にて、われらを集めあひせさせ、足手^{あて}をさすらせ、起き臥し申が」(短編Ⅱ 酒吞童子)「おにその間に子をあひする事ふ

んべつあるべし。いろいろになぶるべし」(狂言六義「鬼の継子」) ㊟ある事物や状態の価値を認めて、それを愛好する。㊠事態のすぐれた点に心をひかれて、それを好ましく思い、賞美する。「扨言ハ扨ハサカヅキナリ。酒ヲバ旨酒トテウマイトテ人ガ飲タガルゾ。飲バ味ガアルゾ。此詞ヲ愛シテ味ノアル心デ扨言ト云ゾ」(莊子抄)「項王白璧ヲ受テ、誠ニ天下ノ重宝也、感悅シテ、座上ニ置テ自愛シ給フ事無^レ類」(太平記^{是升、合體、事類}) ㊡強く興味をひかれる事物を対象として、それと親しく取組むことを楽しむ。しばしば執着する気持を表わす。「自分が興味を感じるものを大事にして、楽しむ。『花ヲ愛スル』。花を見て楽しむ」(日葡)「庭前ニ犬共集テ囓合ヒケルヲ見テ、此禪門面白キ事ニ思テ、是ヲ愛スル事骨髓ニ入レリ」(太平記^{異、相類、人、道、義})「又いづくともしらず若き男来り、某か酒を愛する者の候」(謡「松虫」)「中将とし久しく笛をあひして吹きしなり」(短編「青葉の笛」)

『室町』の「あいす(愛)」の語義のうち、㊠と㊡が、『妙貞問答』「あい(愛)」の意義に対応する動詞「あいす(愛す)」の意義と見做すことができる。

三・三 『太平記抜書』における「あい(愛)」の現れ方

軍記物語の『太平記』(十四世紀後半)を抜粋して出版された『太平記抜書』(1610年までの成立)には、「あい(愛)」は、一例存する。

親にも超てむつまじきは同氣兄弟の愛也(巻第五「師直師泰出家事付薬師寺通世事」)

この例は、『室町』の「あい(愛)」の項目の㊠において、『太平記』巻二九から引かれている用例と、表記は異なるものの、同一の文である。また、『太平記抜書』の原拠本と思しい「慶長八年刊古活本」でも、

親ニモ超テムツマシキハ、同氣兄弟ノ愛也。(「師直師泰出家事付 薬師寺通世事」巻二九・『太平記三』一三六ページ^{注6})

と、やはり同一の文である。

『太平記抜書』の「あい(愛)」の当該例の場合、「どうき(同気)」の意味が問題となるが、『時代別国語大辞典 室町時代編』第四巻(2000年刊・三省堂)の「どうき(同気)」の項目には、

どうき「同気」それぞれが、ともに同じ気持、気質を持った者どうしであること。特に、親子・兄弟などの間柄にいう。「同^{ドウ}氣^キ」(広本節用)「同^{ドウ}氣^キ」(永祿五節用)「外へ行トテ、父母ニ云テ行ハ、同氣相感故也。父母ホド同気々質ノ者ハアルベカラズ」(応永本論語抄^里)「同声 同氣―ハ易ニアリ。∴同氣相求ハ、同ジ類ナ者、類ヲモイヲシテ一所エヨル者ナリ」(玉塵)「親ニモ超テムツマシキハ、同氣(平

仮名「とうき」兄弟ノ愛也。子ニモ不^レ劣ナツカシキハ、
多年主従ノ好也」(『太平記』開元師事直)

とあり、この語は漢籍と結びつきが強い文献に見られるようではあるが、節用集にも掲載されているので、ある程度は流布していた語であろう。

「どうき(同気)」が、少なくとも室町時代には、同じ気持ちを持った者同士であること、特に親子・兄弟などの間柄に対して言うとするれば、『太平記拔書』の「あい(愛)」の使用例は、〈兄弟間の情愛〉の意であり、これは、室町時代に「あい(愛)」の語義として、既に確認されている意義である。

四 おわりに

以上、キリシタン資料における「あい(愛)」について検討してきた。そもそも、キリシタン資料では、漢語名詞としての「あい(愛)」の用例は、非常に少ない。しかも、用例の存する文献も、『落葉集』、『妙貞問答』、『太平記拔書』に限られ、キリスト教的愛に関わるものはない。

まず、『落葉集』には、単字漢語としての「あい(愛)」の存在を示すと見做せる例が四例あるものの、意義は示されていない。

『妙貞問答』には、「あい(愛)」は、六例存する。それら六例は、いずれも〈欲望(愛欲)〉の意で用いられている。〈欲望(愛

欲)〉の意義は、『室町』では、「あい(愛)」の語義としては、立てられておらず、キリシタン資料で確認できたこともさることながら、『室町』の「あい(愛)」の項目に新たに、仏教語の用法として語義を立てる必要が生じたことになる。『妙貞問答』は、仏法などの反駁の書であるがゆえに、仏教思想に根本的に関わる煩惱の一つである〈欲望(愛欲)〉としての「あい(愛)」について、比較的詳しく取り上げられていて、六例も用例が見られるわけであるが、キリシタン資料以外のこの時期の国内文献からも、仏教用語としての、「あい(愛)」の使用例を見出せる可能性が高いと思われる。

『太平記拔書』には、「あい(愛)」は、一例のみ存する。これは、〈兄弟間の情愛〉の意で用いられており、『室町』にも、「あい(愛)」の語義として、認められている意義である。『太平記拔書』の当該例は、原拠本の表現をそのまま取り入れたものであると判断される。『太平記拔書』の抜き書きのしかたには、キリシタン思想のありかたの反映がうかがえると言わ^ホれており、当該例の〈兄弟間の情愛〉という意義は、キリシタン思想には抵触しないという判断によつて、この箇所はそのまま残つたものと思われる。当時のキリスト教思想とは相容れないはずのところの「あい(愛)」という語について、『妙貞問答』においては、まさしく否定的に取り上げられているものの、『太平記拔書』では、キリスト教思想には抵触しない用語と見做されて、許容されているわけ

である。

「あい(愛)」「あいす(愛す)」が、キリスト教的愛を指す語として使われるようになるのは、すでに指摘されているように近代になってからである。

注1 フーベルト・チースリク『キリシタン宗教文学の靈性』『キリシタン文化研究会会報』第一八年第四号(一九七七年一月)、後に『キリシタン教理書』(教文館・一九九三年刊)に再録、小島幸枝「たいせつ(大切)」『講座日本語の語彙』第一〇巻(明治書院・一九八三年刊)。

注2 「キリシタン資料と「おんあい(恩愛)」——キリシタン資料における「あい(愛)」の一考察として」(『藤女子大学国文学雑誌』第九三号・二〇一五年一月)。

注3 『室町』以外の主要な国語大辞典・古語大辞典では、「あい(愛)」の項目は、次のようにある。

『日本国語大辞典 第二版』第一卷(2001年刊・小学館)には、

あい【愛】『名』①親子、兄弟などが互いにかわいがり、いつくしみあう心。いつくしみ。いとおしみ。*万葉集(8c後)五・八〇二・題詞「釈迦如来(略)又説、愛無_レ過_レ子、至極大聖、尚有_二愛_一子之心」*梁塵秘抄(1179頃)二・四句神歌「遊女(あそび)の好むもの、

雜芸(ぎふげい)鼓(つづみ)小端舟(こはしぶね)、笠(おほがさ)翳(かざし)艫取女(ともとりめ)、男のあい祈る百大夫」*太平記(14c後)二九・師直師泰出家事「親にも超(こえ)てむつまじきは、同氣兄弟の愛(アイ)なり」*童子問(1707)上・四五「問、仁畢竟止於愛歟。曰、畢竟止於愛。愛実徳也。非_レ愛則無_二以見其徳_一也」*吾輩は猫である(1905-06)〈夏目漱石〉「どうしても我等猫族が親子の愛(あい)を完(まった)くして美しい家族的生活をするには」*孝経「聖治章「聖人因_レ嚴以教_レ敬、因_レ親以教_レ愛」②仏語。④十二因縁の一つ。ものを貪(むさぼ)り執着すること。欲愛(性欲)・有無(生存欲)・非有愛(生存を否定する欲)の三愛その他がある。*正法眼蔵(231-53)仏教「十二因縁といふは、一者無明、二者行、三者識、四者名色(みやうしき)、五者六入、六者触、七者受、八者愛、九者取、十者有、十一者生、十二者老死」*妙一本仮名書き法華經(鎌倉中)二・譬喩品第三「もし貪着して愛(アイ)をなさば、すなはちためにやかれなん」*俱舍論「九「在_二姪愛前_一受、貪_二資具姪_一愛」⑤浄・不浄の二種の愛。法愛と欲愛、善愛と不善愛などをいう。*北本涅槃經「一三「愛有二種。一者善愛。二者不善愛。

不善愛者唯愚求之善法愛者諸菩薩求」*大毘婆沙論一
 二九「愛有二種。一染汚、謂貪。二不染汚。謂、信」
 ③子供などをかわいがること。愛撫(あいぶ)すること。
 町末―近世初)『其上悴をようてうちやくしたな』『て
 うちやくは致しませぬ愛を致しました』*浄瑠璃・
 頼朝伊豆日記(1693頃)二「いだぎ上、ちぶさ参ら
 せかきなでて〈略〉なげき給へば若君は、いつものあ
 いとおぼするにや」④(品物などに)ほれこんで大切
 に思うこと。秘藏して愛玩(あいがん)すること。*
 俳諧・矢橋家資料―天和二年歌仙(1616)「三(みつ)
 の愛あり団(うちは)と香と尺八と〈暁雲〉涼州竹の
 物干を序す〈麝時〉」*咄本・醒睡笑(1628)八「慈
 照院殿、愛に思召さるる壺あり」*俳諧・炭俵(1694)
 下「とうがらし〈略〉かれが愛をうくるや、石台にの
 せられて、竹椽のはしのかたにあるは、上々の仕合な
 り」⑤顔だちや態度などがかわいらしくて人をひきつ
 けること。あいきよう。*浮世草子・風流曲三味線
 (1706)二・三「都に名高き芸子瀬川竹之丞といへる
 美君に、今すこし愛(アイ)の増たる生れつき」*浄
 瑠璃・信州姥捨山(1730)四「扱(やて)愛(アイ)
 のある殿様、アノ可愛らしい顔付では、勾当の内侍が

靡かぬも道理々々」*浮世草子・当世芝居氣質(1777)
 三・二「しぞこなひが却て愛(アイ)になりての大評判」
 *枕久物語(1809)〈幸田露伴〉三「色が白うて、髪
 が美うて、目に何とも云へぬ愛があつて、口つきが尋
 常で」⑥人との応対が柔らかいさま。あいそ。*浮世
 草子・好色二代男(1684)三・二「まねけぼうなづく、
 笑へばあいをなし、いつとなく消(きへ)にける」*
 雑俳・若紫(1741―44)「細工名人愛の無い顔」*滑
 稽本・浮世風呂(1809)一三 四・中「向の噂(かか)
 や隣の児(いと)なぞ對手(あひて)にして、あほう
 口をたたけば、夫(それ)が愛(アイ)に為(なつ)て」
 ⑦キリスト教で、神が人類のすべてを無限にいつくし
 むこと。また、神の持つているような私情を離れた無
 限の慈悲。↓アガペー。*詩人ブラウニング(1800)
 〈植村正久〉「我は上帝を信じ真理を信じ愛を信するな
 りと」*基督信徒の慰(1893)〈内村鑑三〉三「嗚呼
 真理なる神よ、願くは余をして永久の愛に於て爾(な
 んど)と一ならしめよ」*欺かざるの記(1908―09)
 〈国木田独步〉明治二八年六月二七日「愛にみち給ふ
 神よ。吾が心の苦しみを取り去り給へ」⑧男女が互い
 にいとしいと思ひ合うこと。異性を慕わしく思うこと。
 恋愛。ラブ、また一般に、相手の人格を認識し理解し

て、いつくしみ慕う感情をいう。＊舞姫（1890）〈森鷗外〉「貧きが中にも楽しいきは今の生活。棄て難きはエリスが愛」＊うもれ木（1892）〈樋口一葉〉六「何とせば永世不滅の愛を得て、我れも君様も完全の世の過ぐるべきと、欲は次第に高まりて」＊吾輩は猫である（1905—06）〈夏目漱石〉二「相互を残りなく解するといふが愛の第一義である」【語誌】（1）「愛」字は、ごく古い時期には、仏教語としての用法を除いて、「うるはし」「めぐし」「うつくし」などと訓読みすることが多く、もっぱら身近な人間、主として親子・夫婦などの肉親の愛情のさまを表わしたと考えられる。（2）中古以降は音読みに「愛」が漢語として定着し、「愛する」の動詞用法とともに、人に好感を与える魅力を表わす用法なども生じた。中世以降は、仏教的な、排斥され超克されるべき煩惱として取り扱われることが多く、この傾向は近世の終わり頃まで続く。明治以降、キリスト教的な西洋風の観念が取り入れられ、「愛」は再び種々の愛情の相を示すようになった。

小学館の『古語大辞典』（1985年刊・小学館）には、

あい【愛】【名】①仏教語。激しい妄念。執着としての愛着。

「——にまとはるる事葛（からづ）の旋（こはび）るがごとし」〔性霊集・一〕。②男女間の愛情。「女、——の心に堪へず

して、東人を恋ひ悲しんで」〔今昔・一六・一四〕。③愛玩すること。愛着を持つこと。「慈照院殿、——におぼし召さるる壺あり」〔咄・醒睡笑・八〕。④幼い者をおかひがること。愛撫。「打擲（ちやう）は致しませぬ。——を致いてござる」〔驚流狂言・縄綱ひ〕。「若君ヲ抱き上げ……嘆き給へば、若君はいつもの——とおぼするにや」〔浄・頼朝伊豆日記・二〕。⑤愛らしさ。かわいらしさ。あいきょう。愛想。「思ひ入れの浅からぬしるしを見せんと、招けばうなづく、笑へば——をなし」〔浮・諸艶大鑑・三〕。「さて、——のある殿様、あのかはいらしい顔つきでは、勾当の内侍が（コチラニ）靡（な）かぬも道理」〔浄・信州姥捨山・四〕↓あいす

『角川古語大辞典』第一巻（1983年刊・角川書店）には、

あい【愛】名 梵語 *piya* ①仏語。自己・血族・親族

に対する血族的愛情。また、苦を避け、常に楽しみたいとする欲望など。「十二因縁といふは、一者無明……八者愛」〔正法眼蔵・仏教〕②仏語。激しい欲望。渴愛（あいつ）。「愛に纏はるること葛の旋るが如し」〔性霊集・一〕③他に対する愛情、いつくしみの心。④広く人間や生物に対する愛情。「亦其臣共の上下ともに道たるを感じ悦び、なを心中に愛満て、しばらくは言葉

もなく、唯其面を視たるばかりは、なを大ひなる謙也」
 「微味幽玄考・三」⑩親子・兄弟のいつくしみ合う心
 「愛は子に過ぐる無し」「万葉・八〇二題詞」「親にも
 超てむつまじきは、同気兄弟の愛也」「太平記・二九」
 ⑪男女が愛し合うこと。恋愛。「あそびの好むもの」
 男の愛祈る百大夫」「梁塵秘抄・四句神歌」「お家請代
 の旧臣越中次郎兵衛盛次が女房桜木、跡に続て上総五
 郎兵衛忠光が妻の若草、愛に愛持二人連」「源平布引
 滝・二」⑫世間からもてはやされること。寵愛（あいよう）
 「世の愛を産けん人の御粧」「元禄風韻」⑬愛玩するこ
 と。愛好すること。「かれが愛をうくるや、石台にの
 せられて、竹椽のはしのかたにあるは、上々の仕合な
 り」「炭俵・下」「三の愛あり団と香と尽八と」「筆の
 しみづ」⑭愛敬（あいき）に同じ。「都に名高き芸子瀬川
 竹之丞といへる美君に、今すこし愛の増したる生れつ
 き」「風流曲三味線・二・三」⑮あいそ。おせじ。また、
 表情や声をつくつて幼児をあやすこと。「まねけばう
 なづく、笑へばあいをなし」「二代男・三・二」「向の
 噂や隣の児などぞ対手にして、あほう口たゝけば、
 夫が愛になつて、能気付けくれるはい」「浮世風
 呂四・中」⑯風情。おもいき。「鶏頭の愛なき窓にう
 ち折て」「智周発句集」⑰最愛の妻。「愛を捨子を捨毗

廬遮阿毗羅昨（びろしやあ）」「俳諧次韻」

『古語大鑑』第一卷（東京大学出版会・二〇一一年刊）には、

アイ【愛】（因親以教愛〔孝経・聖治章〕）①親子・男

女など、人間関係の上で、相手を深く思い、いとお
 しむこと。又、その思い。慈しみ。「又説、愛無過

子」「万五・八〇二題詞」。似「移」愛妾人前哭、同「失

時臣意外歌」「菅家文章四・二五二」。勝事（かつこと）

を求（もとむる）時（とき）は、愛（あひ）を兵（へ

い）にいたす（保元上九二一六）②満たされることを

求めて、むさぼるように欲しいと思うこと。又、その

心。渴愛。十二因縁の一ともなつた。「上第二問云其

生久如、今答言從癡有愛、即我病生者（維摩上

宮疏下一・四八下17）。いみじき智者もしぬるお（を）

りは、みつのあひ（い）をこそ、おこすなれ「栄花

三〇・二五三」

とある。

注4 海老沢有道『キリシタン教理書』（教文館・一九九三年刊）

五〇九ページ。

注5 『妙貞問答』からの引用は、すべて注4の『キリシタン教

理書』による。

注6 『日本古典文学大系』第三六卷（岩波書店・一九六二年刊）。

注7 大塚光信「解題」『天理圖書館善本叢書（和書之部）』第四九卷（八

木書店・一九七八年刊）。

注8 宮地敦子『身心語彙の史的研究』（明治書院・一九七九年刊）
一七三ページ。

（うるしぎまぎまぎと／本学教授）

第二〇二号 目次

二〇一九年十二月

『西鶴諸国ばなし』巻五の五「執心の息筋」論……佐藤 優 芽
漱石・樗牛のホイットマン論（下）……………関 谷 博
『醒睡笑』所収笑话における……………
「花よりも団子」の意味的重層性について……………漆 崎 正 人
否定型生応答要求表現に対する応答の揺れについて……………

……………揚 妻 祐 樹

一冊 五〇〇円